

南多摩発見伝
おかびと
丘陵人の宝もの

～遺跡からみた多摩丘陵の歴史～



東京都立埋蔵文化財調査センター

プロローグ 多摩ニュータウン遺跡発掘調査の歩み

日本最大級の計画市街地、多摩ニュータウン。この丘陵からは964ヶ所の遺跡が見つかり、私たちはこれを40年かけて調査してきました。その貴重な成果がぎっしり詰まった東京都立埋蔵文化財調査センターは、まるで丘陵人たちの宝箱です。

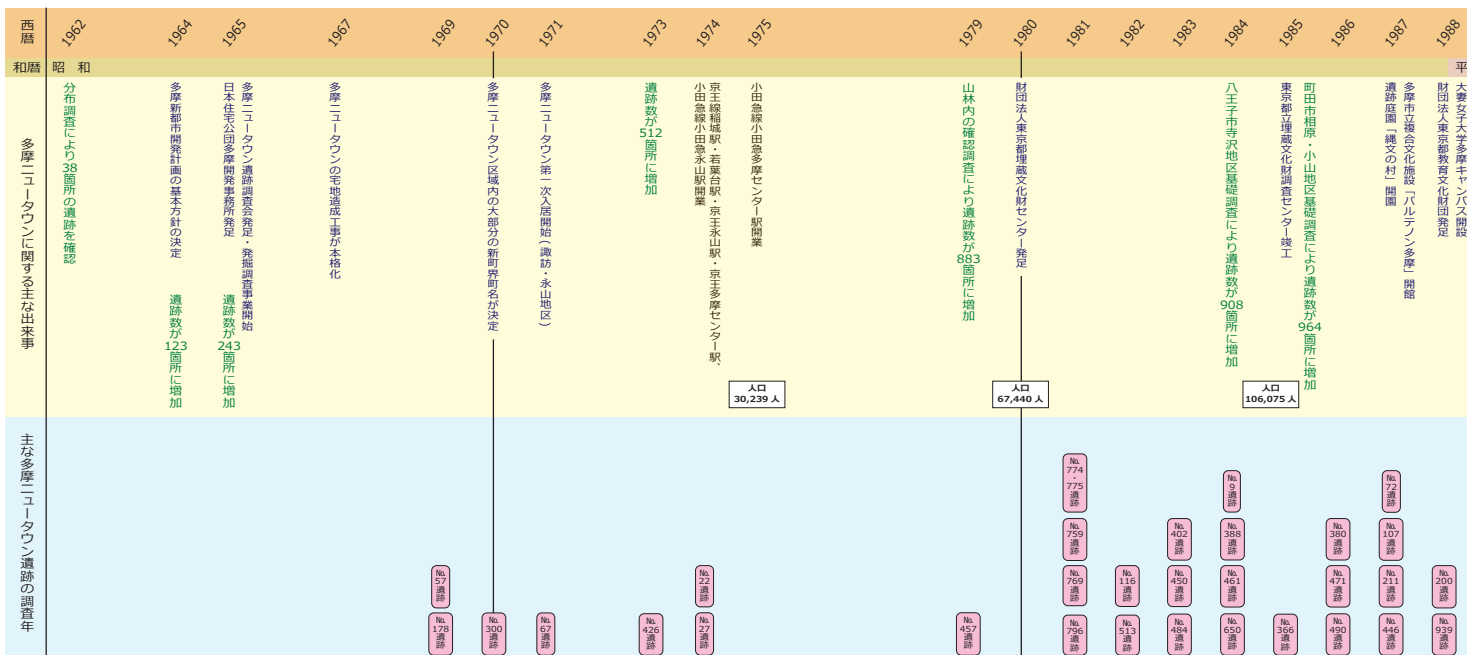
丘陵人たちの歴史は32,000年前に始まります。彼らは大型獣を求めて移動していました。やがて土器の出現により生活が一変します。この時代は一万年以上続き、丘陵に多くの遺跡を残しました。次の弥生時代の遺跡は、この丘陵では多くありません。古墳時代では、丘陵開発を進めた集団の集落やその有力者の墓などが見つかっていません。奈良時代になると、武蔵国の国府・国分寺造営に関連して、瓦や須恵器などの生産が活発になりました。平安時代後期～鎌倉時代にかけては、末法思想の影響でいくつかの経塚がつくられ、動乱の時代である室町時代～安土桃山時代には、この丘陵にも武士の居館が築かれました。そして江戸時代になると、この丘陵では里山の資源を活かした炭焼きがさかんになりました。約3万年に及ぶ丘陵人たちの文化や知恵が凝縮された当センターの展示を、どうぞご堪能ください。

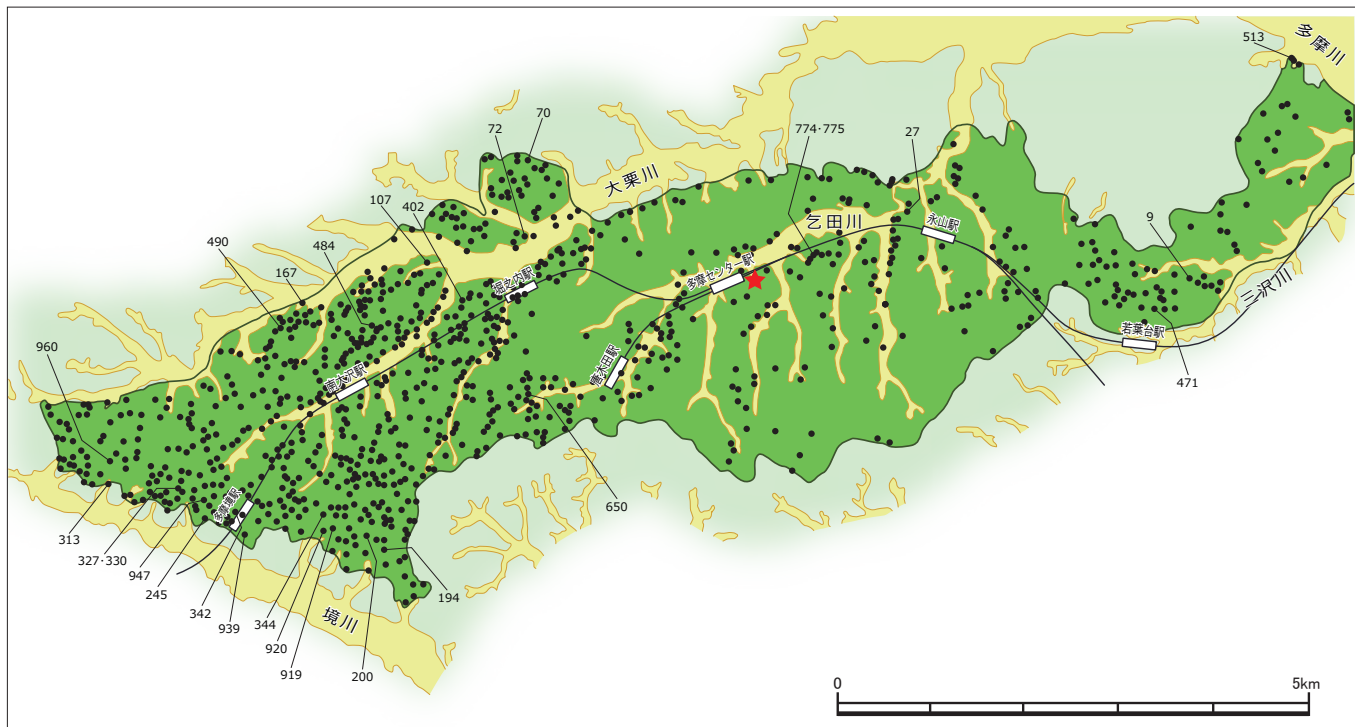


1970年のNo. 57遺跡 [多摩市落合]
山王下の尾根付近から撮影。中央の丘が、現在では遺跡庭園「縄文の村」になっている。



2005年に同じ場所を撮影した写真
水田が広がっていた谷戸は姿を消し、現在では多くの建物が建っている。





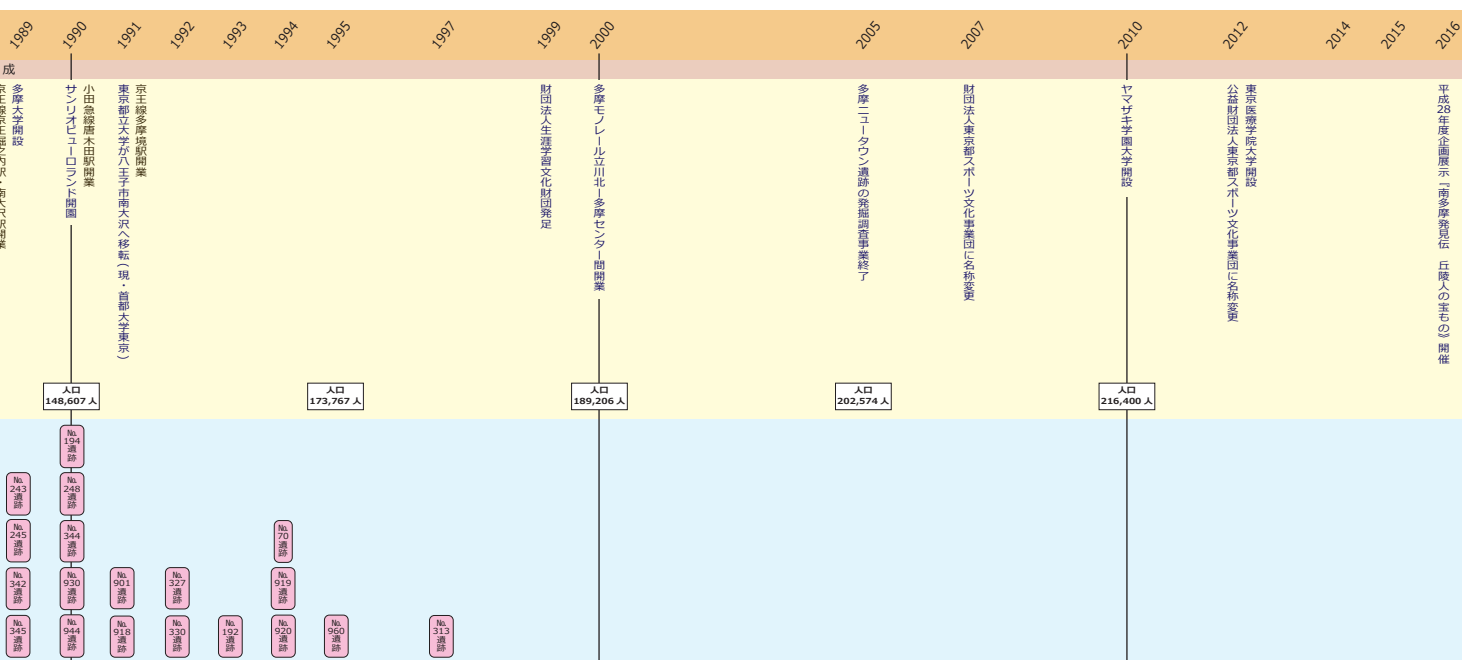
多摩ニュータウン遺跡の分布図

「多摩ニュータウン遺跡」とは、多摩ニュータウン開発事業区域内で発見・調査された遺跡の総称です。遺跡名には地名ではなく、「多摩ニュータウン遺跡No. 72 遺跡」のように1～964の番号が割り当てられています。

多摩ニュータウン地域は東側を多摩川に、西側を境川にはさまれたところにあり、さらに北側には大栗川が、中央には乞田川が流れ、南側には三沢川などが流れています。多摩ニュータウン地域では、これらの河川によって開析された谷が樹枝状に発達し、特有の地形を形成しています。964ヶ所の遺跡は、河川沿いの緩斜面や段丘面、谷部などに分布します。

- 遺跡
- ★ 東京都立埋蔵文化財調査センター

※図中の番号は、展示パネルで取り扱った主な遺跡を表しています。



後期旧石器時代～縄文時代草創期

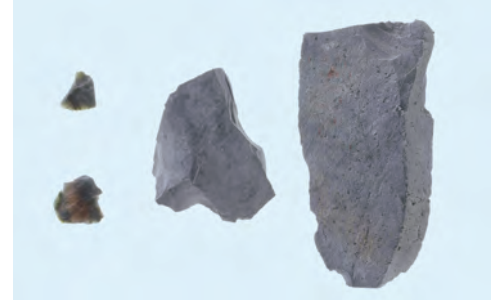
食料を求めて移動する暮らし

多摩ニュータウン地域で人々が暮らし始めたのは、今から約 32,000 年前、氷河期の終わり頃でした。気候は現在の北海道に近く、主な食料は針葉樹林にすむ大型の獣や川を遡ってくる鮭、草木の実などででした。人々は、ナウマンゾウやオオツノジカといった獲物を求めて、移動する生活を送っていました。

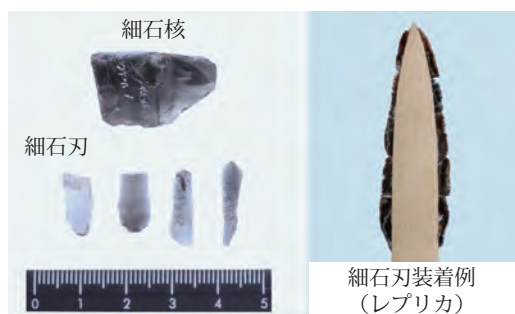
暖かくなり、縄文土器が出現した

20,000 年前頃を過ぎると、気候は暖かくなり始めました。食料となる動植物の種類や量の変化に適応するために、それまでとは異なる新しい石器が作られるようになりました。

そして、15,000 年前頃、土器が登場すると、食材の加工技術や調理方法が飛躍的に進歩し、人々の生活は大きく変わりました。縄文時代の幕開けです。



多摩ニュータウン地域で最も古い石器が出土した No. 402 遺跡 [八王子市松木]
柱のように掘り残してあるところから、石器が出土した。石器は、台形様石器（下段左）、搔器（下段中央）、彫器（下段右）。



Late Paleolithic period Wandering life in search of food

People began living in the Tama New Town area about 32,000 years ago—towards the end of the Ice Age. The climate was similar to that of Hokkaido today, so most of their food came from the large animals that lived in the coniferous forests, the salmon that swam up the rivers, and the nuts, fruits, and seeds that grew on nearby plants. They lived a transitory life, seeking out enormous game like the Palaeoloxodon naumanni elephant and the Megaloceros giganteus elk.

Incipient Jomon period As the climate was warming, the Jomon pottery appeared

After about 20,000 years ago, the weather began to warm. In order to adjust to changes in the types and prevalence of the animals they used for food, the people of the area began making stone implements that were different than the ones they used before. Earthenware entered the scene about 15,000 years ago, dramatically improving food processing techniques and preparation methods. People's lives were radically altered, and the Jomon period had begun.

縄文時代早期・前期

竪穴住居の生活が始まった

地球規模の火山活動が徐々に減り、気候温暖化は一段と進みました。大型動物にかわって増加した、脚の速いイノシシやシカなどの中小の動物が狩猟の対象になりました。このため、弓矢や「陥し穴」などの新しい狩りの方法が発達しました。

また、食料に占める植物の割合も増し、それらを加工するための土器や石器が数多く作られました。

多摩ニュータウン地域では、この頃から竪穴住居が作られ始めます。



斜面に掘られた無数の「陥し穴」
No.490 遺跡 [八王子市上柚木]

拡大する丘陵人の動き

温暖な気候は前期中頃（約 6,000 年前）にピークとなり、海水面は現在よりも 3～5 m ほど上昇していました（縄文海進）。

多摩ニュータウン地域では、この時期の住居跡は少ないものの、丘陵のほぼ全域で前期後半の土器が見つかることから、たちの活動の範囲が広がっていったことがうかがえます。

土器には、いろいろな文様が様々な道具を使って描かれ、石器の種類も増えました。また、玦状耳飾りなどの装身具も作られました。



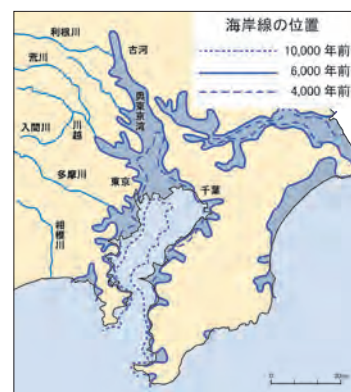
前期前半の住居跡
No.27 遺跡 [多摩市永山]



前期前半の土器
No. 205 遺跡 [八王子市南大沢]



玦状耳飾り
No. 753 遺跡 [多摩市落合]



縄文海進
(日本第四紀学会 1987 を元に作成)

Initial Jomon Period People started living in pit dwellings

As volcanic activity gradually subsided on a global scale, the climate began to warm up even more. Rather than hunting large game, people began to go after smaller, nimbler animals like wild boar and deer. This required that they develop new hunting methods, such as bows and arrows or trap pits. At the same time, plants became a greater portion of people's diets, and they made numerous potteries and stone tools for processing these new foods.

This is also the period when pit dwellings begin to be built in the Tama New Town area.

Early Jomon period Okabito(the dwellers of the Tama hills) expanded their activity

The warm climate peaked around the middle of the early Jomon period (about 6,000 years ago), when sea levels were around three to five meters higher than now, it also known as the Jomon transgression.

Although we have very few habitation sites in the Tama New Town area from this period, the fact that we have found a lot of potteries from the later half of the early Jomon period nearly everywhere across the hills leads us to suspect that the Okabito expanded their range of activity during this time. The potteries features a variety of patterns that were drawn with different kinds of tools, and the types of stone tools increased as well. The people of this time also made accessories such as Ketsujo-mimikazari earrings.

縄文時代中期

大きなムラが出現した

約 5,000 年前、温暖な気候は安定し、獣や魚、山菜や木の
実が豊富な落葉広葉樹や照葉樹の大きな森が広がってしま
した。丘陵人たちは豊かな自然環境を背景に大きなムラを作り、
安定した定住生活をするようになりました。

ムラには決められた場所に「捨て場」があり、土偶や石棒
などのまつりや儀式に使われた道具も発見されています。

土器の文様にはへびなどの動物をモチーフにしたものが多
く、有孔鏝付土器のような特殊な形の土器も作られます。



中期前半のムラ（茶色部分が住居跡）
No.471 遺跡 [稲城市若葉台]

丘陵に往き交う人々

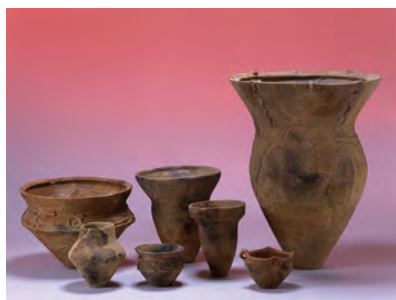
南関東で最大規模を誇るNo. 72 遺跡では、中期後半（約 4,500
年前）の住居跡が 275 軒も発見されました。多数の遺物の中
には、このムラの人々が遠方のムラの人々とさかんに交流し
ていたことを示すものも含まれています。例えば、黒曜石は
主に中部地方から、ヒスイは北陸地方から運ばれたものです。
また、わずかですが近畿・東海・東北地方などの土器も見つ
かっています。これらの品々のうち、黒曜石やヒスイは、こ
のムラを中継地点として、さらに複数のムラへ運ばれたと考
えられています。



中期後半の大きなムラ
No.72 遺跡 [八王子市堀之内]



中期前半の土器



中期後半の土器



東北地方の影響を受けた土器
No. 72 遺跡 [八王子市堀之内]

Early-middle Jomon period Large settlements appeared

By about 5,000 years ago the mild climate had become stable, giving rise to large deciduous broad-leaved forests and laurel forests where people could hunt game, fish, forage for wild vegetables, and collect nuts and fruits from trees. In this rich nature, Okabito began to come together to form large settlements where they would live more stable, regular lives.

Each settlement would have a designated disposal site, and the discoveries we have made there have given us a wealth of information.

Much of the pottery from this time features snakes or other animal motifs, while other examples have distinctive shapes reminiscent of Yukotsubatsuki-doki (pottery with pin holes and ring). We have also discovered items used in festivals or rituals, such as Dogu clay figurines and Sekibo phalluses.

Late-middle Jomon period The people came and went in the hills

The No. 72 ruins is the most massive site in the southern Kanto region. Here, we have found of some 275 dwellings dating back about 4,500 years to the late-middle Jomon period. Among the numerous relics discovered here are some that indicate lively interaction between the people of this settlement and those living in settlements farther away. For example, the obsidian were mainly brought by Chubu area, and the jade had come in Hokuriku area. Some potteries carried from Kinki, Tokai, Hokuriku, Tohoku, and northern Kanto areas. This settlement may have acted as a kind of relay point, where obsidian and jade in particular would come through on their way to being transported to other settlements.

縄文時代後期

丘陵からおりる人々

多摩ニュータウン^{ちいき}地域では、後期前半（約4,000年前）までのムラは、少ないながらもみられます。この時期の遺跡からは、石を規則的に並べた配石遺構^{はいせきいこう}などの特殊な遺構やまつりなどで使われたと思われる道具が多く見つかります。これらの道具には、丘陵^{おか}人の安寧^{あんねい}や豊かさへの祈りが込められているのでしょう。

後期後半になると、人々はなぜかこの丘陵^{おか}からいっせいに姿を消してしまいます。



後期前半のムラ
No.194 遺跡 [町田市小山ヶ丘]

Late Jomon period

The people who came down from the hills

Although small, the settlements that existed in the Tama New Town area prior to the first half of the late Jomon (until about 4,000 years ago) stood on the top of the hills. Ruins from this era feature distinctive stone floored relics called Haiseki, as well as numerous tools thought to have been used during festivals and similar occasions. These items may express the hopes of the hill dwellers for tranquility and abundance in their lives. In the second half of the late Jomon period, the people for some reason disappear from the hills all at once.



後期前半の土器
No.920 遺跡 [町田市小山ヶ丘]

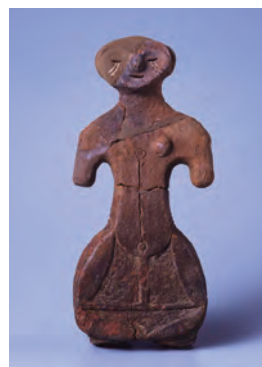


配石遺構
No.245 遺跡 [町田市小山ヶ丘]



多摩ニュータウンの土偶たち

体の特徴から、女性しかも妊婦だとわかる土偶。本などで紹介されている有名土偶の中には、表情やポーズなどから、まつりや儀式^{ぎしき}に使われたのではないかと考えられているものもあります。一方、多摩ニュータウン地域で出土する土偶のほとんどは、これらの有名土偶とはつくりの異なる縄文時代中期の「背面人体文土偶」^{はいめんじんたいもん}。そのなんともいえない怪しい表情には、人々の恐れや敬いの気持ちが感じられます。後・晩期のものが多い有名土偶と同じように考えることはできませんが、きっと、丘陵^{おか}人の心の世界に関わる、重要な役割^{にん}を担っていたのでしょう。



左：多摩ニュータウン遺跡の「背面人体文土偶」 右：「丘陵のヴィーナス」 No.471 遺跡 [稲城市若葉台]



「石ころ」を「石器」に変えるには？

人間は昔から、様々な場面で石を利用してきました。金属がなかった旧石器時代や縄文時代では、石は生活を左右するほど、なくてはならないものだったのです。石をいろいろな用途で使うために、丘陵人が駆使した技とはどのようなものだったのでしょうか。

1. 石器を作る「道具」

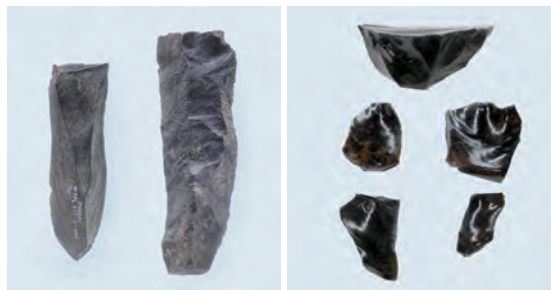
石器を作るには、まず「道具」が必要になります。残念ながら、「これは間違いなく石器を作った道具だ」と認められるものは見つかっていませんが、発掘調査に基づく研究の成果は、石器作りの様々な技を明らかにしました。



左：石器作りの道具 右：押圧剥離の様子

2. 剥片を作る技術

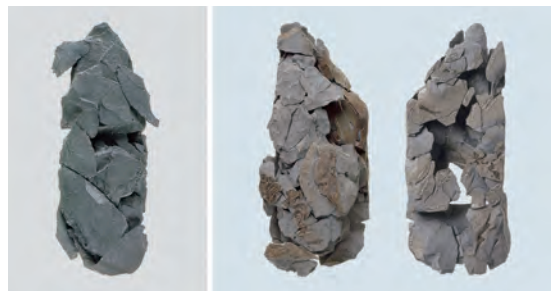
むやみやたらに石をたたいても石器はできません。丘陵人は、石（石核）から同じような薄い石のかけら（剥片）を何枚も続けて作る技を持っていました。



左：石刃 No.774・775 遺跡 [多摩市豊ヶ丘]
右：石核・剥片の復元品

3. まるで動画の逆再生

石器を作る時にできる、たくさんの細かい破片。これをつなぎ合わせる「接合」という作業があります。地味な仕事ですが根気強く続けることで、石器作りの謎を解明する鍵となるのです。



左：旧石器時代の接合資料 No.27 遺跡 [多摩市永山]
右：縄文時代の接合資料 No.796 遺跡 [八王子市堀之内]

4. 石の質の違いで石器も変わる

ガラスのように鋭く割れる石、デコボコ、ザラザラな割れ口になる石など、その質の違いは様々です。丘陵人は石の個性を活かしていろいろな種類の石器を作りだす知識と技、そして応用力を身につけていました。

写真の石器材質

有舌尖頭器：チャート（左側2点）、凝灰岩
スタンプ形石器：砂岩 凹石：斑レイ岩
抉入磨石：閃緑岩 礫器：ホルンフェルス



様々な石器 No.433 遺跡 [八王子市越野]ほか

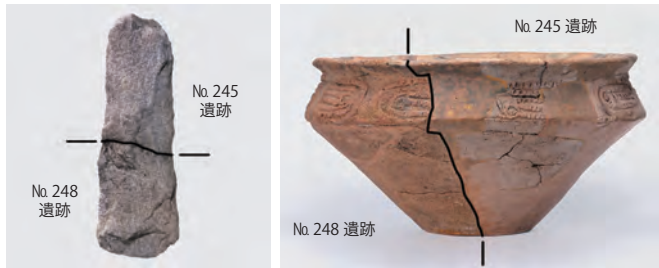


多摩ニュータウンの土器作り

旧石器から縄文へ、人々の生活を一変させた土器。その土器がどのように作られていたのかがうかがえる遺跡が見つかりました。粘土を採掘したNo. 248 遺跡と、それに隣接するNo. 245 遺跡です。No. 245 遺跡では、住居跡の床に積まれた粘土や焼く前の縄文土器、何らかの理由で焼かれてしまった粘土の塊などが見つっています。二つの遺跡の間では、遺物の接合例が2例ほど見つかり、粘土の調達と土器の製作に絡んで、両者が密接な関係にあったことが明らかになりました。丘陵人の持つ技術の一端が垣間見えるようです。



No. 245・248 遺跡周辺の空撮写真（平成2年撮影）

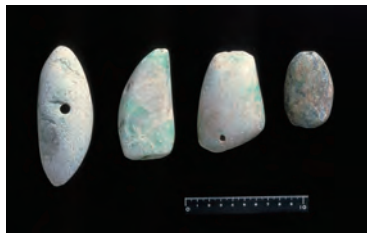


2つの遺跡間で接合した打製石斧（左）と浅鉢（右）



遠くから来たもの

丘陵人の生活は、おおむね手近に調達できるもので成り立っていました。しかし、遺跡からは、時として、遠くでしか手に入らないものが見つかることもあります。例えば、黒曜石。これは長野、伊豆・箱根、神津島などでしか採れませんが、石鏃などを作るのにぜひとも欲しいものでした。また、No. 72 遺跡で見つかったようなヒスイ製品は新潟県姫川流域産、三角柱状土製品も北陸地方に特徴的なもので、希少価値のある珍しいものだったと思われます。人々の求めに応じて様々な地域からもたらされたものが、生活を支え、彩りを添えていたのです。



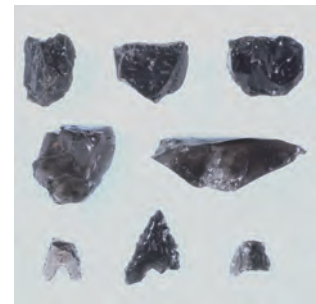
ヒスイ製大珠



三角柱状土製品



黒曜石・ヒスイ・三角柱状土製品の産地



黒曜石製石核・石鏃

弥生時代

米作りが始まった頃

二千数百年前、九州や近畿地方では、大陸から米作りが伝わり、金属製の道具の使用も始まります。しかし、関東地方においては、この新しい文化の到来はやや遅れたようです。縄文時代の終り頃以来途絶えていた人々の姿がこの丘陵に戻ってくるのは、弥生時代中期になってからのことです。

中期前半の特徴は、土器が単独で見つかる場合が多いという点です。多摩ニュータウン地域では、この時期の住居や墓は見つかっていません。

中期後半になると、ムラが出現し、方形周溝墓と呼ばれるリーダーの墓もつくられます。No. 939 遺跡では方形周溝墓が見つっていますが、埋葬施設はのちの時代に削られてしまったようで、それを囲む4条の溝だけが残っていました。この時期の遺跡は丘陵の南西部に限られ、その数も多くありません。No. 920 遺跡のように、人々が低地から離れた丘陵頂部を生活の場にした理由は何だったのでしょうか。



丘陵頂部に営まれた中期後半のムラ
No.920 遺跡 [町田市小山ヶ丘]



方形周溝墓 (白線部分が溝)
No.939 遺跡 [町田市小山ヶ丘]



中期前半の土器
弥生時代になると壺形土器が定型化し、甕形土器とセットで使われるようになる。



中期後半の土器
これらの土器は、No. 345 遺跡 [町田市小山ヶ丘] の住居跡からまとまって出土した。

Yayoi period When the making of rice began

The making of rice comes from the continent in Kyushu and the Kinki district two thousand several hundred years ago, and the use of the metal tool begins, too. However, it is after it is late a little that this new culture comes to the Kanto district. It becomes in the middle of Yayoi period, and it is after that the figure of people cut off since the end of the Jomon period returns to this hill.

The characteristic of remains of the first half in the middle of Yayoi period is the point where an earthenware vessel is often found in alone. In the Tama new subdivision area, a house and the grave of this time are not found.

A spot appears, and the grave of the leader called the tomb surrounded by a square moat is made, but the remains are limited to the southwestern part of the hill, and there are not many numbers if it becomes in the latter half of the middle in Yayoi period. Like No. 920 remains, what would the reason that chose the hill top where people left the low land in the place of the life be?

古墳時代

列島各地に前方後円墳が出現した頃

近畿地方では、大王を中心とするヤマト政権が各地の豪族との結びつきを強め、支配力を及ぼしていきます。それを示すように、3世紀後半以降、列島各地に前方後円墳などの大きな古墳（墓）がつくられるようになりました。

この多摩丘陵でも、低い墳丘をもつ周溝墓が出現し、南西部では複数のムラが形成されます。ムラでは鉄製農具の普及により、農地の開墾が進み、開発が一時的に活発化しました。しかし、ほどなくして人々は再びこの丘陵から姿を消してしまいます。

台頭する新興勢力

6～7世紀になると、4世紀後半以降、人の活動が途絶えていた丘陵に古墳群や横穴墓群が出現します。これらの墓には、新たにこの地に移り住んだ集団の有力者とその親族が葬られたと考えられます。彼らは、丘陵の開墾や土器・木器作りなどの手工業生産を生業としていました。

この頃の住居には、朝鮮半島から伝わったカマドが普及し、日常生活のうえでも大きな変革があった時代です。



整然と並ぶ前期の住居跡
No.344 遺跡 [町田市小山ヶ丘]



後期のカマドのある住居跡
No.327・330 遺跡 [町田市小山ヶ丘]



中央に埋葬施設を持つ前期の墓
No.200 遺跡 [町田市小山ヶ丘]



横穴墓前面の石積み施設
No.313 遺跡 [町田市小山ヶ丘]

Early Kofun period When Keyhole-shaped mound tombs appeared

In the Kinki region, the king and his the Yamato government sought to strengthen their connections with ruling families in each region in order to exert more control. To demonstrate that power, they had enormous mounds tombs built during the late third century throughout the Japanese archipelago—including large keyhole-shaped mounded tombs called Zenpoko-en-fun.

Even in the Tama hills we find tombs with low mound and moat, and several settlement sites around the southwest area of the hills. Land cultivation advanced in the settlements with the popularization of iron farm tools, temporarily stimulating development in the hills. But not long after, the people again disappeared from this area.

Late Kofun period The rise of new power

In the 6th and 7th centuries, mound groups and tunnel tomb groups begin to appear in the hills where human activity had stopped in the late 4th century. They are thought to have been built for the group leaders and their family members who had recently moved to the hilly areas. The people here lived by handicraft production of pottery and wooden goods, as well as reclaiming the hillsides.

This was a time of great innovations in daily living, with many of the homes featuring Kamado ovens originally brought from the Korean peninsula.

奈良時代

窯業生産と丘陵開発の進展

710 (和銅3) 年、飛鳥の藤原京から奈良の平城京に都が遷され、本格的な律令国家が建設されました。

武蔵国の国府・国分寺が近隣に設置されたこともあり、多摩丘陵での瓦や須恵器などの窯業生産が活発になります。その際、丘陵の豊富な粘土と燃料としての木材資源がさかんに利用されました。

No. 342 遺跡、No. 446 遺跡、No. 513 遺跡などからは、瓦や須恵器を焼いた窯跡が発見されています。また、No. 107 遺跡からは、「官」の字の焼印が押された木皿が出土したことから、役所との関連性がうかがえます。



多摩ニュータウン地域最古の須恵器窯 (上)
とそこで焼かれた製品 (下)
No. 342 遺跡 [町田市小山ヶ丘]

Nara period The spread of hills developments and ceramic production

In 710, the capital was moved from Fujiwara-kyo in Asuka to Heijo-kyo in Nara. The building of the Japanese nation under the Ritsuryo codes had begun in earnest. The provincial government and Kokubunji (state-supported provincial temples) in Musashi Province were set up nearby, making the Tama hills an active site for the production of roof tiles, Sue ware, and similar products. The people here made active use of the abundant clay and wood-based fuels available in the hilly areas. Remains of kiln used to make roof tiles and Sue ware have been discovered at the No. 342, No. 446, and No. 513 sites. Archeologists also found a wooden plate branded with a character such as "Kan" at site No. 107, suggesting that the site may have been tied to some kind of administrative office.



お 丘陵で作られた瓦がどこへ運ばれたのか？

多摩丘陵で焼かれた瓦は、武蔵国と相模国両方に運ばれました。

蓮華文や剣菱文をモチーフとした軒丸瓦や唐草文・重弧文の軒平瓦は、No. 513 遺跡 (大丸窯跡) をはじめ、No. 944 遺跡、No. 248 遺跡 (セイカチクボ窯跡) の瓦窯跡から発見されました。これらと同じものが武蔵国分寺跡 (国分寺市) から見つかっています。また、No. 279 遺跡 (瓦尾根瓦窯跡群) では、唐草文の軒平瓦や縄目叩きの平瓦が発見されましたが、同じものが相模国分寺跡 (神奈川県海老名市) から出土しています。

このように、武蔵と相模の国境に位置する南多摩の瓦屋 (= 瓦工場) では、国や役所からの求めに応じて、国分寺向けの瓦を生産し、供給していたのです。



瓦窯跡 (左) と出土した蓮華文
モチーフの軒丸瓦 (上)
No. 944 遺跡 [町田市小山ヶ丘]



No. 279 遺跡 (瓦尾根瓦窯跡群)
[町田市小山ヶ丘]

平安時代

丘陵開発と鉄器生産

多摩丘陵では、平安時代になると御牧とよばれる朝廷直轄の馬牧が置かれます。小野牧（多摩市）・由比牧（八王子市）・小川牧（あきる野市）の3ヶ所です。この牧の管理を任せられたのが、在地の富豪層でした。彼らは馬を生産しながら耕地を開墾し、窯業や鍛冶などを生業としていました。

10～11世紀頃には、御牧周辺の村々では馬具や武器などを作る鍛冶工房が増加し、鉄鍬の出土数は農具や工具を大きく上回ります。領民を支配し、馬と鉄の生産を掌握した富豪層こそが、やがては武士団へと成長していったのです。

Heian period Hill development and production of ironware

In Tama-hills, in the Heian period horse pasture called Mimaki of the government direct control was established. Those pastures are Ono pasture and Yui pasture and Ogawa pasture at 3 points. Those pastures are managed by landed classes in various areas. They reclaim plowland and doing production of a horse, the ceramic industry and the smithery were made a bread-and-butter job.

In 10th-around 11th century the smithery atelier where a harness and weapon are made was increased by the surrounding villages of Mimaki and iron arrowhead is a farm implement and a tool are exceeded. The landed classes who ruled population of the fief and controlled production of horse and iron, soon grew into the warrior bands.



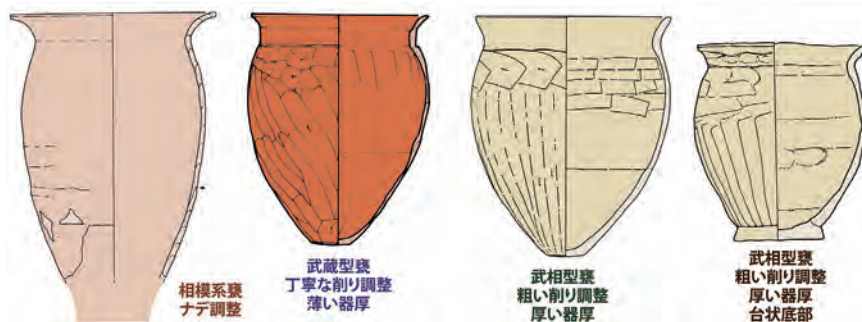
馬具を製作した鍛冶工房跡
No. 248 遺跡 [町田市小山ヶ丘]



平安時代の轡
No. 178 遺跡 [八王子市上柚木]

コラレ 土器からわかることは？

古代の土器は、文様もなく、一見すると皆同じように見えますが、詳しく調べることで、様々なことがわかります。右図に、南多摩窯跡群で焼かれた須恵器杯を年代順に並べてみました。規格や技術の変化などにより、少しずつ形が変わっていますね。この違いを見分けることで、土器の出土した遺構の年代を推定することもできます。下図は、多摩ニュータウン遺跡から出土した奈良～平安時代の土師器甕の一例ですが、形や色調、仕上げの方法などが異なります。これは作られた地域の差で、これらをもとに流通や地域開発の様子などを推測することができます。



相模系甕
ナデ調整

武蔵型甕
丁寧な削り調整
薄い器厚

武相型甕
粗い削り調整
厚い器厚

武相型甕
粗い削り調整
厚い器厚
台状底部

平安時代後期～鎌倉時代

経塚がつくられた頃

平安時代の後期から鎌倉時代の初め頃（11～13世紀）にかけて、仏教（釈迦）の教えが弱まるとする「末法思想」が流行します。それとともに、各地の富豪層は領地内の安泰と来世での幸福を願って経典を納めた経塚を築き、そこを聖地としました。

白山神社経塚や松蓮寺経塚をはじめ、No. 513 遺跡、落合経塚（No. 650 遺跡）からは、紙経を納める銅製の経筒が発見されました。当時、経典そのものが信仰の対象でした。

Heian period Kamakura period The building of Sutra mounds

Throughout the late Heian and early Kamakura periods (from the 11th to 13th centuries) there was a trend towards "Mappo-shiso", in which it was believed that Buddhist providence were falling into decline. In response, the landed classes in various areas began building sutra mounds in which they buried scripture with a prayer for peace in their domains and happiness in the afterlife. These mounds then were designated as holy sites.

Copper canisters used to house paper sutras have been discovered at the sutra mounds at Hakusan Shrine and Syoren-ji Temple, as well as at site No. 513 and the Ochiai sutra mound at site No. 650. At the time, the scriptures themselves were an object of worship.



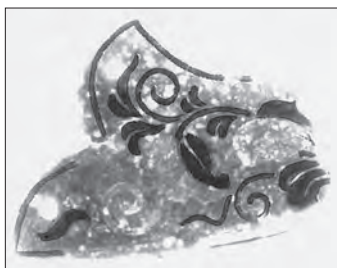
経塚の検出状況（上）と経筒・灰釉壺（下）
落合経塚（No. 650 遺跡）[多摩市唐木田]



モノが語る武士の発生

この丘陵からは、武士の発生を物語る資料が、断片的ながらも発見されています。例えば、鎌倉時代初期の武士の館跡と目されるNo. 22 遺跡からは、馬の鞍の下部に装着する鞆に付ける野沓という象嵌文様が施された飾金具が見つかりました。また、No. 426 遺跡やNo. 796 遺跡からは、日本刀の部品である金銅装太刀の柄頭や足金物などが出土しています。いずれも精巧に作られていることから、京都周辺の武器工場で生産された可能性があります。

さらに、鎌倉時代初期の寺院跡とされるNo. 692 遺跡からは、国産のやきもののほかに貴重な中国製のやきものも多く見つかっていることから、広範なネットワークをもつ武士団の存在をうかがうことができます。これらは、丘陵に展開した武士文化の一端を物語る重要な資料です。



野沓のX線画像
No. 22 遺跡 [多摩市聖ヶ丘]



金銅装太刀の柄頭
No. 426 遺跡 [八王子市堀之内]



銅製双脚足金物
No. 796 遺跡 [八王子市堀之内]

室町時代～江戸時代

東国武士団の駆ける丘陵

鎌倉幕府が倒れると、時代は有力な大名が覇を争う動乱の世になっていきました。交通の要衝であるこの丘陵にも、武士の居館がいくつか築かれました。これらの遺跡からは、武家の威信やそれに基づく生活文化を示すように、中国製や古瀬戸などの上質なやきものなどが出土しています。また、城や多量の金を埋納した遺構なども発見され、当時の緊張した様子もうかがえます。こうした武士の多くは江戸時代に入ると、武士の身分を捨て村の中心的な存在となっていきました。



伝大石氏館跡
No.107 遺跡 [八王子市松木]

江戸と共に生きる村々

徳川幕府の成立により、江戸の町は世界でも有数の都市に発展しました。人々の生活を支えるため、周辺の村々でも、野菜などの生産がさかんになりました。田畑に適した平地に乏しい丘陵では、里山の資源を活かし、燃料用の炭が多く焼かれました。

一方、村々にも全国各地の産物が江戸を通じて流通するようになりました。食器をはじめ、生活用具に様々なやきものが用いられるようになったのも、この頃です。こうした暮らしぶりは、多摩ニュータウンの開発直前まで名残りをとどめていました。



金埋納遺構
No.484 遺跡 [八王子市南大沢]



左：No. 243 遺跡 [町田市小山ヶ丘] 出土 近世の日常什器
右：No. 671 遺跡 [八王子市越野] 出土 オランダ・レグー窯 プリントウェア (江戸時代後期)



上：谷戸奥に営まれた江戸時代の炭焼き農家跡
No.919 遺跡 [町田市小山ヶ丘]
左：石窯
No. 960 遺跡 [町田市小山ヶ丘]

Muromachi period Azuchi-Momoyama period Hills taken by the warrior bands of the East

The collapse of the Kamakura government threw the nation into a turbulent period where powerful daimyo warlords battled for supremacy. The Tama hills were a strategic point along travel routes, and many samurai residences were built in this area as well. Fine ceramics discovered at these sites, including pieces made in China and Koseto, point to the prestige and accompanying lifestyle and culture that these warrior families enjoyed. Archeologists have also found armed bases and ancient structures in which large sums of money were buried, suggesting some of the strain and tension of the era. Many of these samurai ended up returning to the land, taking up a key role in their villages as Japan entered the Edo period.

Edo period Satellite villages of Edo

Once the Tokugawa shogunate had been established, Edo developed into one of the world's leading capitals. The surrounding villages also enjoyed a lively trade in vegetables and other products. With very little of the flat land suitable for a rice paddy, the Tama hills took advantage of their woods resources to produce large amounts of charcoal for fuel.

At the same time, products from each region of Japan ended up passing through Edo. This is the era when people began to use ceramics as tableware and a variety of other living goods, their way of life leaving its mark on the area right up until the development of Tama New Town.

エピソード 新たな丘陵文化創造のために

ご案内しましたとおり、開発以前の多摩ニュータウンには、旧石器時代から江戸時代までの多くの遺跡がありました。その名残りはわずかではありますが、今もなお留めています。当センターに隣接した遺跡庭園「縄文の村」は、No. 57 遺跡を保存、公開したものです。八王子市の大塚公園内にはNo. 67 遺跡で見つかった縄文時代の敷石住居跡が移築保存されています。また、八王子市松木にあったNo. 107 遺跡は安土桃山時代の居館跡が見つかった遺跡ですが、その西半分は緑地として保存されています。多摩市和田にはニュータウン周辺で最も大きな古墳である稲荷塚古墳があり、近くには庚申塚古墳や塚原古墳群の一部も残されています。

さらに、開発以前の村々の辻には、地蔵や庚申塔など多くの石造物が見られました。これらは丘陵人たちの素朴な信仰の所産ですが、開発によって居場所を失ってしまいました。その一部は散逸しましたが、残された石造物は一定の場所などに集められ、わずかに人々の信仰をつなぎ留めています。

丘陵に残る貴重な歴史的な遺産。これからの丘陵の暮らしを考えるうえで、これらの遺産を今後どのように活用すべきかは大きな課題ですが、それは決して難しいことではありません。まずは、一人一人が身近な遺産に接することから始めたいかがでしょうか。幸いニュータウン周辺は緑も多く、歴史的遺産を通して古代に思いを馳せるにはよい環境です。遠い昔の丘陵人たちの知恵や文化を紹介した当センターの展示が、これからの皆さんの文化的・生活創造の一助となれば、私どもの大きな喜びです。



現在の多摩センター駅前（パルテノン大通り）



『南多摩発見伝 丘陵人の宝もの～遺跡からみた多摩丘陵の歴史～』は、東京都立埋蔵文化財調査センター展示ホールの展示解説冊子として作成しました。

編集 公益財団法人東京都スポーツ文化事業団
東京都埋蔵文化財センター
発行 東京都立埋蔵文化財調査センター
〒206-0033 多摩市落合一丁目14番2
042-373-5296
発行日 2016（平成28）年3月31日